

第52回新潟県小中学校教頭会研究大会 ブロック別研究大会の目指すもの

新潟県小中学校教頭会研究部

1 第52回新潟県小中学校教頭会研究大会（第10回ブロック別研究大会）研究主題について

(1) 研究主題

「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」

（キーワード 生き抜く力・絆づくり） <第10期全国統一研究主題>

(2) 研究主題設定の意義

少子高齢化や高度情報化、厳しい経済情勢や格差の存在などを背景として、教育を取り巻く社会情勢は大きく変化してきており、学力・学習意欲や規範意識、体力・運動能力などに関するさまざまな課題が指摘されている。

こうした中で、これからの教育にあっては、個々の課題について適切に対応するとともに、子どもから高齢者までの人の成長を見据えながら、学校・家庭・地域など、社会を挙げて教育に取り組むことが、これまで以上に必要とされており、教育全般にわたる総合的な取組が求められている。

教育の現場にいる私たちは、変化に対応する教育の在り方を、日本国憲法や教育基本法の理念に基づき、学校教育の中に実現していくことが、大きな使命であると考えます。このような背景を踏まえ、「地域に根ざした特色ある学校づくり」を展開し、「生きる力」を育むことをねらいに、豊かな人間性や創造性をもち、国際社会の一員としての自覚をもった人間を育成するために、私たちは貢献しなくてはならない。

昨年度は、全国公立学校教頭会（全公教）の第10期統一研究主題「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」のもと、第51回新潟県研究大会ブロック別研究大会を開催し、2年次の研究を進めてきた。今年度の研究大会（ブロック別研究大会）は、昨年の成果と課題を踏まえ、更なる「研究課題の焦点化」「研究の協働性の充実」「教頭の関与性の明確化」をめざし、会員の参加意識を高め、継続研究の成果や課題が会員一人一人に共有され、課題解決に寄与できるように努めていく。

2 サブテーマについて

(1) サブテーマ

「生涯にわたって能動的に学び続ける子どもを育む学校づくり」（～3年次研究～）

(2) サブテーマ設定の趣旨

第10期の研究では、自立・協働・創造、に向けた一人一人の主体的な学びを保障する学校づくりがより重要である。その教育活動の中核となる教頭の在り方を追究するため、サブテーマ「生涯にわたって能動的に学び続ける子どもを育む学校づくり」を設定した。

「生涯にわたって能動的に学び続ける子ども」とは、次のような資質や能力を備えた子どもである。

- ・多様な個性・能力を伸ばし、充実した生活を主体的に切り開くことができる子ども
「自立した子ども」
- ・個人や社会の多様性を尊重し、共に支え合い、高め合うことができる子ども
「協働する子ども」
- ・自立・協働を通じて新たな価値を作り出すことのできる子ども
「創造する子ども」

私たちは、児童生徒一人一人が、自己の能力と可能性を最大限に高め、様々な人と協調・協働しながら、自己実現と社会貢献を図れるように学校運営を充実していく必要がある。

各学校においては、学習指導要領の理念である「生きる力」を育むとともに、学びの成果を公共の視点に立って広く日常生活の中で生かすことができるようにすることが大切である。

また、児童生徒の公共心を育むために、学校教育に加えて、地域の様々な人々とのふれあいや、地域での様々な体験などにより、社会性や規範意識、生命の尊重、思いやりなど、豊かな人間性を育んでいくことが必要である。

これからの激動の社会を生き抜く子どもたちには、自ら考え、学校内外の多様な人々と協働しながら主体的に課題を解決し、新たな価値を創造する力が求められている。このような力を育むために、学校・家庭・地域の連携をさらに促進し、協働型・双方向型の新しい学びへの移行が必要となってくる。

今後は、一層学校内外の様々な知恵・資源を取り入れていくことにより、学校の在り方を、児童生徒の教育の場であると同時に、多様な人が集まり協働し創造する学びの拠点として深化させていくことが期待され、そのための教頭のリーダーシップが重要となってくる。新潟県小中学校教頭会は、組織的・協働的に、教頭の在り方を鋭角的にかつ多面的に追究し、新潟県の教育の振興に寄与していく。

(3) サブテーマ追究の窓口と実践の視点

サブテーマ「生涯にわたって能動的に学び続ける子どもを育む学校づくり」の追究のために、6つの窓口を設定した。私たちの研究は、新潟県・新潟市の課題をしっかりと受け止めるとともに、自校の抱えている課題を把握し、その解決を図ることが目的である。課題を解明する実践においては、教頭の職務内容に焦点付けた視点が必要である。そこで、全公教の内容例・視点例を参考にして、6つの窓口と新潟県小中学校教頭会としての実践の視点を設定した。

(実践の視点はあくまでも例示であり、各単位教頭会において追究していく内容を絞り込んで実の上がる研究を推進する。)

【第1課題；教育課程に関する課題】

- 特色ある学校づくりを推進するための教育課程の編成をどのように行うか。
- 言語活動や理数教育，小学校外国語活動の充実に向けてどのように取り組むか。
- 基礎的・基本的な知識・技能の習得を図り，思考力・判断力・表現力等を育成するためにどのように取り組むか。
- 小1プロブレム，中1ギャップ等の課題にどのように取り組んでいくか。（幼小及び小中連携や小中一貫教育をどのように推進していくか）。

【第2課題；子どもの発達に関する課題】

- 通常学級における特別支援教育をどのように充実させていくか。
- 児童生徒の社会性を涵養し，豊かな人間性を育成する教育はどうあればよいか。
- 児童・生徒の自己実現を目指す進路指導体制をいかに構築していくか。
- 不登校児童・生徒への対応や教育相談をどのように進めていくか。
- キャリア教育の充実に向けてどのように取り組んでいくか。

【第3課題；教育環境整備に関する課題】

- 地域の人材を学校教育にどのように活用していくか。
- これからの教育に適した施設・設備や教材・教具をどのように整備していくか。
- 児童生徒の登下校の安全を確保するために，学校としてどのように対応し，地域の諸機関との連携を図っていくか。
- 学校の統廃合における教育問題への対応をどのように進めるか。
- 学校諸経費未納問題に対して，教育委員会とどのように連携し，取り組んでいくか。

【第4課題；組織・運営に関する課題】

- 自然災害に対応し，児童生徒の安全を確保するために，学校としてどのように体制を作り，地域の関係諸機関との連携を図っていくか。
- 互いにとって有意義になるような学校と地域との連携を進める体制を，どのように構築していくか。
- 教職員個々の資質や能力を生かし，更に伸ばしていくための組織の運営はどうあればよいか。
- 協同的な学びと豊かな同僚性をもった教職員集団を育てる組織をどう作り，どう運営すればよいか。

【第5課題；教職員の専門性に関する課題】

- 教職員の資質・能力を伸ばし創造性を発揮させるために，どのように指導を進めるか。
- 教職員の力量を向上させるために，OJTをどのように活用していくか。
- ミドルリーダーをどのように育成し，学校運営の活性化を図っていくか。

○教職員の資質・能力を伸ばし、創造性を発揮させるためにどのように指導を進めるか。

【第6課題；教頭の職務内容や職務機能に迫る課題】

○小中連携や学力向上を推進するための教頭の役割はどうあればよいか。

○学校の危機管理における教頭の職務と役割はどのようにあればよいか。

○教職員の資質・能力の向上を図るための教頭の役割はどうあればよいか。

3 研究の基本方針

全国公立学校教頭会の研究の基本方針を踏まえ、新潟県小中学校教頭会として次の3点に焦点を当てた実践的研究を進める。＜3つの**C**>

(1)客観的で継続性のある研究を進める……………**continuity**

(2)組織的で協働性のある研究を進める……………**collaboration**

(3)教頭としての関与性を明確にした研究を推進する……………**commitment**

今年度も、郡市教頭会ごとに研究の協働性を高めるとともに、

①研究テーマは何か

②研究テーマに正対する結論は何か

③結論を支える具体的な事実は何か

の整合性を高めた論述をし、会員一人一人に研究の成果が共有されるように配慮していく。

研究大会の効果を評価する4つのレベルというものがある。（出典：アメリカの経営学者カークパトリック博士が1959年に提案した教育の評価法のモデルより）

○レベル1 研究大会に参加したことに満足する

○レベル2 学んだことで新たな知識や技能を習得する

○レベル3 実際の教育現場での行動変容、向上的な行動変容が見られる

○レベル4 学校組織全体の業績や成果があがる

ブロック別研究大会では、会員一人一人の学びのレベルは違ってくるであろうが、大会要項の精読・協議の柱の確認などを行い「研究成果を会員一人一人の勤務校や郡市に持ち帰ること」と「本研究大会の成果と課題を明確にして、29年度の全県研究大会につなげること」を意識して、研究大会に臨んでいただきたい。